

三島通りを歩く—明治の街づくりの名残りを求めて—

◎阿子島 功 (山形大学人文学部教授)

明治初期に県令三島通庸が計画した近代的な中央官庁街の地割は現在でもおおよそ引き継がれている。しかし、当時の遺構は約130年を経て、どれだけ残っているのだろうか。

1. 県庁前通りと三島通り

明治14年、明治天皇の行幸を山形に迎えるや、県令三島通庸は9月29日の第1日に県庁、勸業製糸所・機織所、第2日の30日には師範学校、仮博物館、福島裁判所山形支庁、授産所を御先導し・・・、県令三島は県治実績を奏上した(山形市史 下巻 近代篇p.163)。山形城下町の北の新開地に新設された公共地区の諸施設こそは土木県令三島の誇る業績の核心であった。明治9年8月、(第3次)山形県の初代県令に赴任した三島は10月29日に県庁新築・学校新築の通達を行い、11月3日新築地で地鎮祭・鎮火祭を行う。山形県新築図錦絵(長谷川竹葉筆 八文字屋より販売)、県内最初の市街写真(菊池新学撮影)はいずれも明治14年である。新築地区の景観は高橋由一の「山形県令道路完成記念画帖(その三) 山形県之巻55図」(明治18年)に収められたが、画の構図は菊池新学撮影の写真とほとんど一致しており、菊池写真をなぞっていることには疑いもない。

山形県新築図錦絵の左上部の説明によれば、

「県庁は(中略)明治十一年県令三島公の新築する所なり。門外数十歩に学校・警察・製糸場・博物館・養生館等薨をならべ、各西洋模造にして、三層四層の楼辺 碧雲に聳え、閣上の時器蒸気の吹笛雲中に辰を報じて学事工事を勧奨し、また県庁の東 数町にして千歳園を設く。地広六万坪、四木三草および和洋の果物菜蔬を播殖せしめて農事を導き、中央小丘を築きて噴水に小瀑布をなし、花木を移して四時の景況を添、人民偕楽の地とす、百事振興万機整理の時至ものというべし。」

当時の県庁は明治44年5月市北大火で焼失した。同位置に大正4年に建造されたのが旧県庁と呼ばれる現在の建物である。正式名は山形県郷土館、

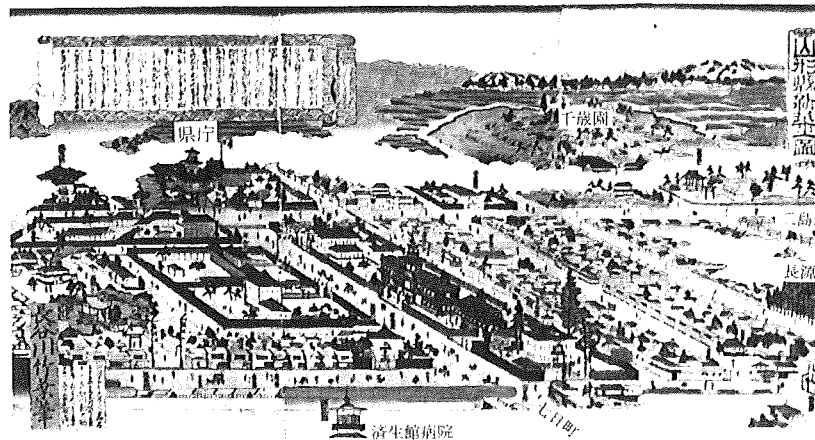


図1 山形県新築図錦絵(長谷川竹葉筆 明治14年 八文字屋より販売 山形大学附属博物館蔵) 錦絵および菊池新学写真は山形大学附属博物館にもある。前者は縦35cm、横68cm、木版色刷りであり、後者は額の内郭が縦56cm、横80.5cm、縁にオリエンタル写真工業複製と記されている。

愛称“文翔館”、昭和50年の県庁移転後は東南村山合同庁舎として使用され、昭和59年3月に国重要文化財指定をうけて復元された。県庁・議事堂の敷地の南縁が**県庁前通り**であり、西の旅籠町・六日町へはまっすぐ(現在の山形新聞本社北側のように)突き抜けてはいなかった。

県庁正面の、七日町にのびる南北道路が三島プラン正面の幹線軸であり、従来の城下町の市街の外側に突き出すように付け加えられた地割である。県庁の**正面道路**の幅は9間、三島の原案では12間であった。旧来の町並みは七日町から旅籠町方面に西に折れていて、この北側部分には、畑地と万日寺敷地があるだけであった。この部分は近世前期に城下町の水害をさけ

て馬見ヶ崎川のつけかえが行われる以前は、馬見ヶ崎川本流河道のあったところで、近世末には万日河原とよばれたところである。文翔館玄関2階に立って（焼失した明治時代県庁正面は3層楼で、3階に明治天皇御真影を納めた。2階から、すなわち県令の目線で）七日町方面を見通すと中央軸線が微妙にずれているようにみえる。

旧県庁付近で明治初期の遺構が残っているとすれば、県庁敷地南縁の低い土塁、裁判所敷地東北縁の低い土塁、県民会館敷地（当時は警察署がおかれた）北西縁の低い土塁であろうか。菊池新学写真によれば道路と敷地との間には石積み溝が掘られている。現在は歩道になっている部分である。錦絵には、生垣らしき区画が描かれているので、神社南西縁の石垣と水路は、当時のままである可能性が高い。

2. 三島神社の角より

三島通りは、現在の山形県立図書館“遊学館”前から東へ、“教育資料館”（旧師範学校校舎 現県立博物館分館）方向へのびる道である。

“遊学館”（旧県知事公舎跡）の南東の角の向かいに三島神社がある。この神社は、山形県新築図錦絵にも描かれており、三島稻荷を祀る。たまたま三島の名前が一致したので、これをよろこんで厚く祀ったといわれる。三島通りは、県庁前通りから東へ向かう幹線軸であり、千歳園庭園の南縁線である。

2-1. 三島神社の角より西を見る

三島通りの西の延長は、県庁前通りを一線に見通すことができない。

『自ら筆ヲ採ラレ縦横罫線ヲ区画シ、県庁・監獄・師範学校・病院等、其位置整然トシテ確定』した（伝記未定稿4 市史近代編p.160）はずの地割は千歳園の南縁線で折れ曲がっている（阿子島,2000）。その理由としては、三島通りが山あてをした可能性、旧河道の起伏と堰水路を避けた可能性などで

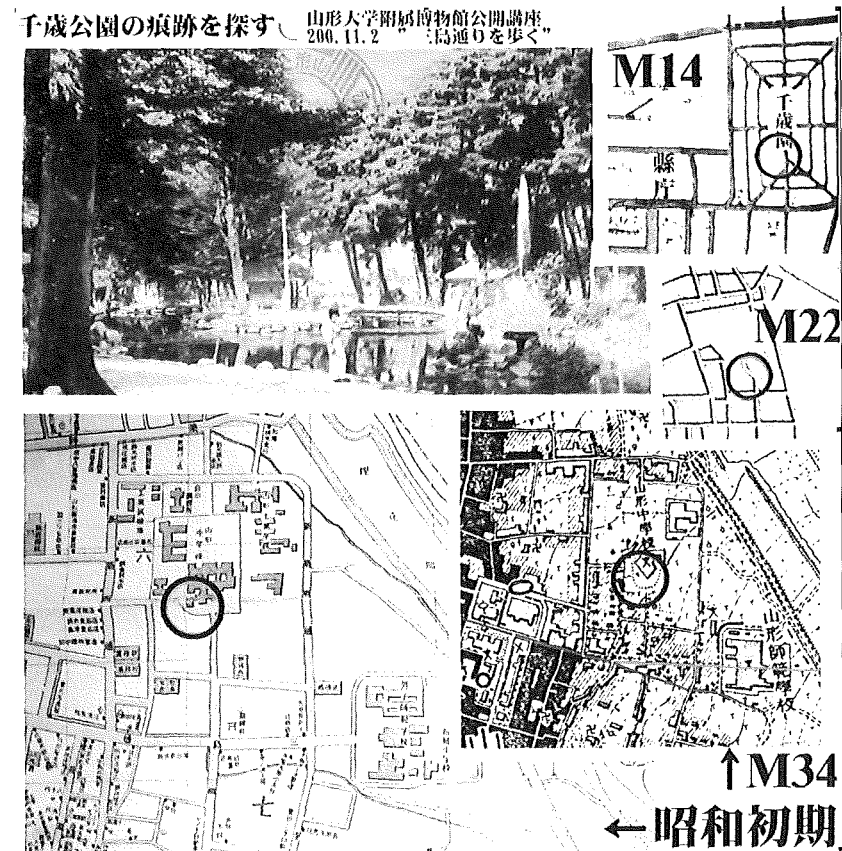


図2 千歳園の遺構を読む

ある。水路に関して、県庁東側の勧業試験場内の5棟、建坪計114坪の水力機織場建設が関わっている。発端は『巡査・看守などの制服の服地の高価なるに苦しみ、水力を利用して被服地を織ろうとした。明治12年1月に創設、のちに給与することができた。鉄製機械を買い入れ、人力を省いて欧米風に則り製造した。国産の綿糸を用いて織り出し外国品輸入を防ごうとし(市史 近代編p.163)』。水利とは八ヶ郷堰である。八ヶ郷堰は三島神社の角から千歳園に入り機織場へむかっていた。

2-2. 三島神社の角より東を見る

東正面に教育資料館(旧師範学校校舎 現県立博物館分館)を見る。

幅広いとはいえない三島通りは、三島の計画当時の姿を残す。道の両側の水路の一部に石積みがある。

旧師範学校校舎3層楼尖塔のまっすぐ背後には盃山に峰つづきの三角の山が見え、借景となっている。

旧師範学校は、明治34年9月にこの地に移転したもので、三島通り設計の時には、三角の山とその中腹の岬(馬見ヶ崎とはこのあたりであろう)と、手前の馬見ヶ崎川の川岸の林が見えたはずである。師範学校校舎の背景となる借景は偶然の結果である。ただし、三島通り設計時に山あてをした可能性は残る。

2-3. 三島神社の角より北を見る

波打つ道路の先に山形県立東高校の正門がみえる。もともとは農業勧業試験場千歳園の中央道路であった。千歳園の広がり約6万坪、新築東通りから新築西通りまで東西幅200間(360m)、南北300間である。「**四木三草および和洋の果物菜蔬を播殖せしめて農事を導き、中央小丘を築きて噴水に小瀑布をなし、花木を移して四時の景況を添、人民偕楽の地とす**」。

園内道路は放射状道路と左渦巻き状の道路との組み合わせの「蜘蛛の巣

型」であったことが、明治14年山形市街図から推定できる。中央の丘は高さ25尺(7.5m)、周囲に堀をめぐらした。明治34年測1:20,000地形図では中央に山形中学校(現在の山形東高校)校舎が描かれ、その前面南半分に土塁をあらわすケバが記されている。この小山と池の遺構とおぼしきものが、東校正門西側の駐車場付近に現存している。その最大比高は約1.5mである。

中央道路が气象台(明治初期よりほぼ現位置)付近で波打っているのは、馬見ヶ崎川の旧河道があったためである。この筋は旧県庁北側へ連なる。

2-4. 三島神社の角より南を見る

新築西通り緑町線は昭和48年3月より県道となった。昭和2年1:3,000山形市街図では八ヶ郷堰と旧河道を示す短冊状の不定形地割の束がみえるだけである。県庁前道路をまっすぐ延長すれば新築西通り緑町線となり、盃山を山あてすることになったが、それは行われなかった。堰と複雑な地割がそれを避けさせたのであろう。

3. 長谷川竹葉錦絵および高橋由一画集の記録精度について

3-1. 長谷川錦絵

明治14年に完成した三島プランを鳥瞰的に、説明的によく現している。例外的に写実的でないのは“霞”の表現である。錦絵には“洛中洛外図屏風”のような霞が2条描かれている。ひとつは三島通りの南～長源寺の間、ひとつは千歳園を横切り県庁裏に連なる。いずれも馬見ヶ崎川旧河道に一致している。旧河道にそった荒地や畑は都市施設で埋めることができなかったために、霞で埋めたというのが私の考えである。

3-2. 高橋由一画集

県庁周辺の新築地区に関しては、明治14年の菊池新学撮影写真をなぞっており、色情報も錦絵があることから、記録性において高橋画が特にすぐ

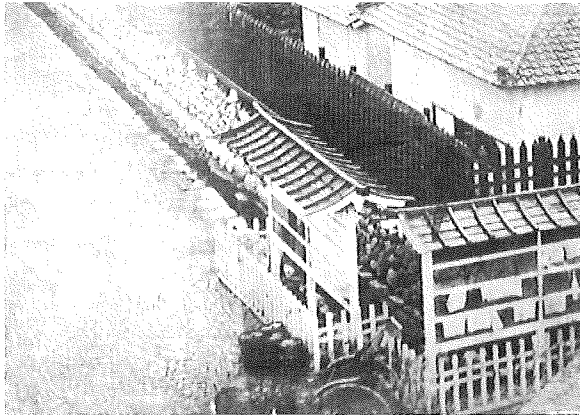


図3 山形大学附属博物館蔵 明治14年菊池新学翁撮影写真より。部分。オリエンタル写真工業複製とある。

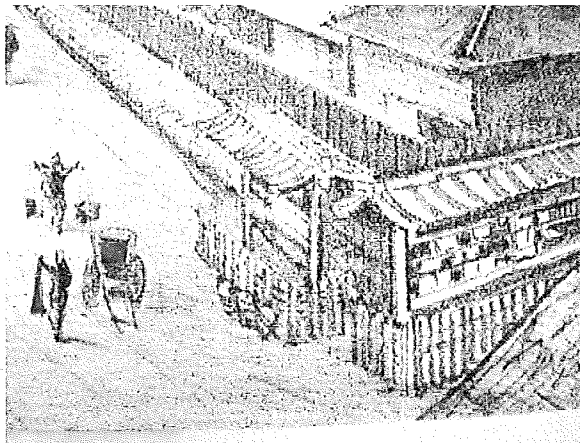


図4 明治18年高橋由一「山形県令道路完成記念画帖(其の三)山形県之巻55図」より。部分。山形大学附属博物館蔵。

れているとはいえない。石垣の表現によって細密画としての評価を試みると、図3、4のように、高橋画では石積みの技法はほとんど読めない。明治11年に架設された山形市坂巻の常盤橋を描いた木版「山形縣下眼鏡橋之真景」(M14 長谷川竹葉筆 五十嵐太右衛門出版 山形大学附属博物館蔵)は石の積み上げ方を意識してよく描いているが、高橋由一「吉原村新道内須川ニ架スル常盤橋」では石積み技法は読めない。なお、常盤橋(眼鏡橋)は明治22年に流失したが、その遠景写真が最近イタリアで発見された(平凡社、2001 大日本全国名所一覽 所収)。しかし、石積みまでは判読しにくい。

以上は、2001年山形大学附属博物館公開講座において、現地観察の際に述べた。千歳園の築山遺構以外については以下に述べている。

文 献

- 阿子島 功(2000)山形市三島通りと借景——山形の景観の考古学。山形大学歴史・地理・人類学論集1、pp.41～50
- 阿子島 功(2002)山形市笹堰の原風景——山形の景観の考古学(2)。山形大学歴史・地理・人類学論集3、pp.45～58
- 柏倉亮吉(1975)山形市史2.1.3泉都の面目。山形市史下巻(近代編)、pp.159～163